



大分県書道

令和6年2月号 No. 404

先を見る眼

阿蘇神社の楼門の修復工事が終わり、楼門が元通りになったというニュースが何日か前に流れました。2016年と2022年の熊本地震では大きな被害が出ました。特に16年の熊本地震で阿蘇神社の楼門がつぶれ、屋根がそのまま地面に落ちていた姿をニュースで見るとショックを受けたことが脳裏に焼きついていたのです。昔、この神社を訪れた時、堂々とした楼門に威厳と美しさを感じていたので残念でたまりませんでした。それが完全に修復された姿を見て本当によかったと喜びました。そして宮大工さんの技のすごさに感動です。このニュースの中で柱の修復の際、古い柱の木に新しい木をつぎ足し補強しているのですが、その太さが違い、新しい木の方が数

センチ太いのです。それは数十年先にこの木の水分が抜け縮んでいくことを予測し計算してその太さにしてあるとのこと。なる程と思いました。先を見る眼をもって「モノ」を造るとのこと。未来を見る眼を持つということ。近目にならないことなど思い知らされました。見えないものを見る力、見通す力、想像力は、まだそこには存在しないものを存在するように見る力なのです。芸術の世界はその存在しない先のものを新しく造り出すことなのです。ですから夢のある世界です。

書の世界でもこのことはとても大切で。一画目の筆を下ろす時、その文字の最後の画がどの長さでどの位置にくるのかを見通して書く必要があります。半紙でも条幅でも多く

代表顧問 戸口勝司
(勝山)

の文字を書く時には最初の文字を書き始める時に最後の文字の位置や大きさなど見通して書く必要があります。「紙を支配する」眼を持つことです。

紙との距離を少し遠くにして天から見下ろす気持ちで紙全体を見ながら書くようにしてみましょう。

